おわりに

B型肝炎ウイルスの持続感染者（HBVキャリア）でも、定期的に「肝臓の状態」をチェックし、その状態に見合った健康管理や必要に応じた適切な治療を受けることに努めていれば、日常生活の制限などは必要ありません。
また、周囲の人も、B型肝炎についての理解を深めていただくことが大切です。

HBs抗原検査が陰性と判定された場合にも、パンフレットに記載してあるような症状や肝機能異常を指摘された場合などには、必ず医師に相談してください。

＜参考文献＞

改訂3版　HBVとB型肝炎の知識（財団法人ウイルス肝炎研究財団　2002年3月）

平成13年度厚生科学研究費補助金「肝がんの発生予防に資するC型肝炎検診の効率的な実施に関する研究」班作成

R100 この印刷物は再生紙（古紙混入率100%）を使用しています。

イラスト●春田真理子

B型肝炎ウイルス検査を受けられる方に

B型肝炎ウイルスの電子顕微鏡写真

大型の丸い粒子がB型肝炎ウイルス（←印）。HBVキャリアの血液の中には、このように細長い桿状粒子や小型球形粒子がたくさん共存しています。

B型肝炎ウイルス（HBV）とは？

肝炎を起こす原因にはいろいろありますが、わが国ではそのほとんどが肝炎ウイルスの感染によるものとされています。ウイルス肝炎のうち、B型肝炎ウイルス（HBV）の感染によるものをB型肝炎と呼びます。

B型肝炎ウイルス（HBV）に感染している人の血液の中にはHBV粒子1個に対して桿状（かんじょう）粒子、小型球型粒子（いずれもHBs抗原タンパク）が、それぞれ50倍から100倍、500倍から1,000倍存在します。ですから、HBs抗原タンパクが検出されている（HBs抗原陽性）ということは、その血液の中にB型肝炎ウイルス（HBV）がいる（感染している）ということを意味します。

B型肝炎ウイルスの持続感染者（HBVキャリア）

B型肝炎ウイルス（HBV）が体内に入り、肝臓で増殖すると、一定期間（潜伏期）を経てから「身体がだるい」「食欲がない」「吐き気がする」などの症状が見られ（発症）、それに引き続いて皮膚が黄色くなること（黄疸）があります。これが急性肝炎と呼ばれる状態です。急性肝炎では、まれに激しい症状を起こすこともありますが、大部分の人では1～3か月で完全に治ります。

ところが、B型肝炎ウイルス（HBV）の感染を受けても症状が軽く、気がつかない場合（不顕性感染）もあるとされています。また、肝炎ウイルスが身体の中から排除されずに住みついてしまう（キャリア化する）ことがあります。このような状態にある人をB型肝炎ウイルスの持続感染者（HBVキャリア）と呼びます。献血や検診などで、HBs抗原陽性と判定された人のほとんどは、B型肝炎ウイルスの持続感染者（HBVキャリア）であることがわかっています。

なお、出生時、あるいは乳幼児期以降に感染した場合には、B型肝炎ウイルスの持続感染者（HBVキャリア）になることはごくまれであることがわかっています。

B型肝炎ウイルス（HBV）に感染していても、症状が軽かったり気がつかない場合もあります。

B型肝炎ウイルス（HBV）の検査

B型肝炎ウイルス（HBV）に感染しているかどうかは、採血して検査します。検査の結果、HBs抗原が検出された（陽性と判定された）場合には、B型肝炎ウイルス（HBV）に感染していると判定します。

肝炎ウイルスに感染しているかどうかは、採血して検査します。

B型肝炎ウイルス（HBV）に感染した場合の経過

B型肝炎ウイルスの持続感染者（HBV）キャリアの約9割の人は健康なのですが、残りの約1割の人にB型慢性肝炎がみられます。B型慢性肝炎の人の一部は、肝硬変や肝がんへと進行することがあるので注意が必要です。

B型肝炎ウイルスの持続感染者（HBVキャリア）であることがわかったら

B型肝炎ウイルスの持続感染者（HBVキャリア）の場合、まったく自覚症状がなくても肝機能検査が異常値を示すことがあります。また、ある時は正常値であっても、別のある時は異常値を示すこともあり、気づかないうちに病気が進行することがあります。

そのため、B型肝炎ウイルスの持続感染者（HBVキャリア）であることがわかったら、医療機関を受診して、「肝臓の状態」をチェックするための検査や指導等を定期的に受け、自己の健康管理に役立てるとともに、必要に応じて適切な治療を受けることをお勧めします。

定期的に主治医に診てもらい、「肝臓の状態」をチェックしましょう。

他人への感染を防ぐために

1）B型肝炎ウイルス（HBV）は、主に感染している人の血液が身体の中に入ることによって感染しますが、ごく常識的な注意事項を守っていれば周囲の人への感染はほとんどありませんので、あまり神経質になることはありません。

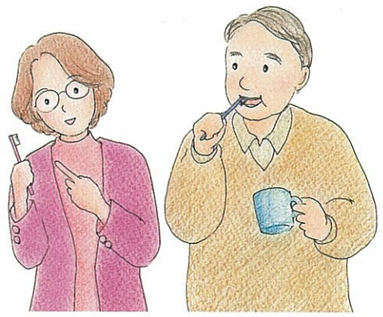
2）例えば、次のような事項を守るように心がけてください。

①血液が付着する可能性のある、カミソリや歯ブラシなどの日用品の共用は避けましょう。

②血液や分泌物がついたものは、しっかりくるんで捨てるか、流水でよく洗い流しましょう。

③外傷、皮膚炎、あるいは鼻血などはできるだけ自分で手当てし、また、手当を受ける場合は、手当をする人が、血液や分泌物をつけないように注意を促しましょう。

④口の中に傷がある場合は、乳幼児に口移しで食物を与えないようにしましょう。

⑤献血はしないようにしましょう。

⑥性行為で感染することもありますので、配偶者が免疫をもっているかどうかを検査し、免疫がない場合には、あらかじめワクチンを接種することをお勧めします。なお、ワクチンの接種については、医師に相談してください。